

生きてちやいけない命などなく。

死んでいい命もない。

だからといって、無駄に生きている命に意味があるだろうか？

生きる事は綺麗事ではなく、命を生かすには金がかかる。

その金銭的負担の事まで考えての発言であれば、いくらでも言えればいい。

現実を判った上で、それでも理想や道徳を説きたければ、好きにすればいい。

だが、ただの正論で綺麗事を吐く奴は——死ねばいい。

アサ子ちゃんはがんばれない

——『恥の多い生涯を送って来ました』

この『人間失格』の主人公の有名な台詞は、著者である太宰治自身の言葉であると解釈されている。あたしもこの作品を読んだが、主人公・大庭が太宰自身をモデルにした私小説であるなら、確かに彼の生涯は誇れるものではないだろう。

自分が他人と違っている事に悩み、道化を演じ、破滅的な女性関係を持ち、アルコールに溺れ、自殺未遂を繰り返し、最後には狂人のレッテルを貼られる。

だが、これは『恥』だろうか？

他人と違っていて、同じように出来ない。

それに苦しみ、破滅的な行為に走り、自殺を選ぶのは『恥』なのか？

もっと周囲を恨んだり、世界を呪ったりしてもいいものを、おかしいのは自分であり、その生涯を『恥』と語った太宰は、本質的には誰よりも人間でありたいと思った、人間らしい人物だったのではないだろうか。

同作の主人公のように、太宰も自殺未遂を繰り返し、最期には入水自殺を遂げている。

自殺は『悪』とされている。

最も重い『罪』とも言われている。

では、自殺するほど苦しんでいる人間はどうすればいい？

自殺は『悪』だから、生きて苦しみ続けろとも言えるのだろうか？

そういう人種は、世の中には死ぬよりつらい事があるのを知らない——知らずに生きていられる幸せな人間なのだろう。だから、そんな事が平気で言える。

死ぬ気になれば何でも出来るというが、これは前提が間違っている。

どうしようも出来なくなった人間が選ぶのが自殺なのだから。

死ぬ気になればなんでも出来るのはポジティブな人間だけで、ネガティブな人間には当てはまらない。

だが、世の中にはポジティブな人間の方が圧倒的に多い。

マイノリティ マジョリティ
少数派は多数派に駆逐される。

結局、数が多い方が正義。

多数決など、数の暴力でしかないのに。

2015年6月某日

『夏への扉、期待の扉』

寝起きの気分は大概が憂鬱で、まともな思考など出来はしない。ロクに働かない頭で考える事は、これまた大概——ろくでもない。

「……………」

なぜ急に太宰治の事など考えたのか判らない。

太宰の作品など『人間失格』と『走れメロス』くらいしか知らないのに。

きつと意味などない。

寝起きに益体もない事を考えるのはいつもの事で、きつと頭を働かせるための準備運動なのだろう。

だから、それ以上の意味なんてないし、自殺の是非もどうでもいい。こんな事はすでに議論され尽くしている。

「……………六時」

壁のアナログ時計に目を向けると、長針が真上、短針が真下を指している。この時期は陽が長くなり、カーテンをしていると午前か午後かは、寝起きの頭では判断に困る。

だが、雀らしき鳥の囀りと、若干の肌寒さから察するに、朝だろう。人間は朝に起きるのだから、寝起きなら朝じゃないのかと思われるかもしれないが、そこは察してほしい。

「……………」

最近、早く目が覚める——というか、長時間眠れない。

睡眠時間が短いと、行動時間や作業効率に影響が出るので、これはよろしくない。冬場はいくらでも眠れるのだが、やはり夏が近いからだろうか。

六月になり、初夏と呼んでも差し支えない気候になってきた。これから鬱陶しい梅雨が来るが、それを抜ければ夏が来る。

——夏。

この単語を聞くと年甲斐もなく期待感が膨らむ。

あたしは夏が嫌いじゃない。

暑いの人混みは嫌いだが、夏の独特の雰囲気は好きだったりする。

何かが始まりそうな予感のようなものを感じる。
そんなものは幻想で、現実には何も起こらない、ただの夢見がちな中二病の一種だと判
つていても。

そして、実際に何も起こらずに終わっていく。

言うほど期待している訳じゃないから、特に絶望もしない。

今年も特に何もなかったな——そんな風に思って終わり。

そうして秋が来て、冬になり、一年は終えていく。

その繰り返し。

きつと今年もそうなる。

その事に対する絶望はない。

希望を持たなければ、絶望のしようがないから。

二十歳の時に人生を投げ、残りも余生だと思って生きてきた。

期待せず、希望は持たず、望まず、欲しないように生きてきた。

それが気付けば三十一歳。

あれからもうすぐ一回り経とうとしている。

人生はなるようになるし、なるようにしかならない。

こうして十一年も生きながらえている事に感謝はしないが、悲観もしない。

まだ、そこまで絶望するような状況じゃない。

だって、期待なんてしちゃいけないから。

けど、それでも——

「……………死にたい」

言わずにはいられない。

というか、こうして口に出さないと、自分が生きているのか判らなくなる。

眠るように死にたいと思っても、腹が空けば目が覚める。人体というのはよく出来てい
て、痛みをもって危険信号を発してくる。眠っている間に餓死などさせてくれない。

空腹で目が覚めると、自分の意思とは関係なく『生きたい』と願っている身体からだに、生き
汚さを感じずにはいられない。

実際、空腹というのは地味につらい。集中力は低下し、胃は痛みを訴え、まともな思考
や行動など出来なくなる。人間は水だけでも数日は生きられるというが、一食抜くだけで
もつらいのだから、餓死するよりも気が狂う方が先だろう。だから、自殺に餓死を選ぶの

は現実的じゃない。

苦しいのは嫌だし。

「……………美味しいもの、食べたいな」

長らく外食をしていない。

お金がないから仕方ないけど、食費のために稼ごうとは思えない。

労働と食欲を天秤に掛けても、食欲に傾かない。

働くくらいなら質素な生活でいい。

けど、そんな質素な生活も限界に来ている。騙し騙しやってきたけど、そろそろ年貢の納め時かもしれない。

太宰がどうか、自殺がどうか、そんな事を考えたのも、そういう状況が現実として見えてきたからかもしれない。

ずっと覚悟はしていた。

それこそ、十一年前に。

そして、いざその時が来ても、やはり危機感を感じない。

いざとなったら怖くなったり、一念発起したりするかもと期待したけど、あたしは本当に、どうしようもなく、生きる事を投げちゃってしまっているらしい。

「……………寝なおそう」

寝ている間に死ねなくても、寝ている間は考えなくていい。

これから鬱陶しい梅雨が来て、それが過ぎれば『あの雰囲気』が訪れる。

ほんの少しの期待を予感させる季節。

馬鹿みたいに晴れた青空と。

日中に比べれば涼しくて静かな夜。

あたしは夏が嫌いじゃない。

「……………んう」

寝ている間に六月が終わればいい。

古典SF『夏への扉』みたいに。

8 アサ子ちゃんがんばれない 2015年6月某日『夏への扉、期待の扉』

いっそ、眠っている間に世界が終わるか、人類が滅亡すればベストだけど、そこまでは望まない。眠ってる間にあたしが死ねば、それで丸く収まるのだから。

「夏か……」

どうせ、何も起こりはしないけど。

その先にあるのは落胆だけだろうけど。

それでも。

——今年もまた、夏が来る。

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『アサ子ちゃんがんばれない』久々の更新です。恐らく、次にこれを書くのはサイトの閉鎖とかのタイミングだと思っていたのですが、まあ、なんというか……季節のせいです。ええ、きつと。

僕のキャラを把握してくださっている方は意外に感じられるかもしれませんが、何気に夏は好きだったりします。あくまで雰囲気とか、映画なんかのイベントだったりとか、季節に付随する要素だけで、暑いのが人混みは大嫌いですが。

今回は言葉少なで終わります。言う事ないですし。

ちなみに『ゾイヤミ』は今月どうなるか判りません。現時点で一文字も書いていない上に、『第3次スパロボZ 天獄篇』を絶賛プレイ中なので。

……ごめんなさい。

2015/6/5 流遠亜沙

本作の掲載に合わせ、『アサ子ちゃんがんばれない』をこちらのサイトに移動しました。

細かい事はブログで言っていると思いますので、今月15日の記事をご覧ください。

なお、『ゾイヤミ』第9話は無事に『ASSAULT form』にて掲載中です。よろしければ、そちらも読んでいただければ嬉しいです。

2015/6/13 追記